



文化財愛護  
シンボルマーク

廻廻 田 遺 跡 墳 古

1988年3月

松江市教育委員会

## 序 文

埋蔵文化財の愛護活用と地域の開発活用化とは一般に相容れにくい要素を持っていて、論議の集中するところである。国土の広狭や体制のちがいまでが要因としてとりあげられたりするが、関係者の必死懸命の努力と、松江市の市民憲章に言う「お互いに人の立場を重んずる」、「つねに広い視野にたつ」、などの善い意思とが提供されてはじめて明るい展望に導くことができるとと思う。

松江市内乃木福富町の廻田遺跡の発掘調査は、昭和62年に有限会社西尾商事によって住宅団地造成工事が行われた際に発見された古墳1基と弥生時代後期の円形竪穴住居跡1軒にかかわるものである。事業規模は約1.5ヘクタールの用地に住宅35戸、公園2ヵ所を設けるものであり、昭和61年4月に当市教育委員会に対して分布調査の依頼があって調査を行なった結果、その時点では区域内に遺跡は発見出来なかつたが、工事着手直後に発見されたものであつて、開発行為者と協議をとげた結果、急拠調査に入り状況を確認したものである。ここで発見された弥生時代後期の住居跡は類例の少ない珍しいものであると思われ精密に記録を保存して広く研究の資料としたいと願っている。本稿を草するに当たり西尾商事はじめ関係者各位に衷心より謝意を申し述べる次第である。

昭和63年3月

松江市教育委員会

教育長 内 田 榮

## 凡 例

1. 本書は昭和62年度に松江市教育委員会が、有限会社西尾商事から委託を受けて実施した廻田遺跡の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は昭和62年7月16日から同年8月11日まで計19日間を要した。
3. 発掘調査の組織は次のとおりである。

委託者 有限会社 西尾商事 代表取締役 西尾豊穂  
受託者 松江市 松江市長 中村芳二郎  
主体者 松江市教育委員会 教育長 内田 榮  
事務局 野津久男（社会教育課課長）  
岡崎雄二郎（文化係長）  
中尾秀信（文化係主事）  
担当者 今岡一三（文化係嘱託員）  
調査員 今岡一三・青木 博（嘱託員）

4. 発掘調査に際しては西尾商事から多大な協力を得た。
5. 出土遺物については、田中義昭（島根大学教授）、松本岩雄、丹羽野 裕、三宅博士（県文化課）の諸氏から有益なる指導を得た。記して感謝の意を表する次第である。
6. 出土遺物の実測及び図面の整理は、今岡一三、青木 博、昌子寛光、瀬古諒子、野津 修、松浦徳子が行なった。また石器の1は丹羽野氏の実測による。
7. 本書の編集は今岡と青木が協議して行ない、それぞれの執筆は目次に記すことにした。

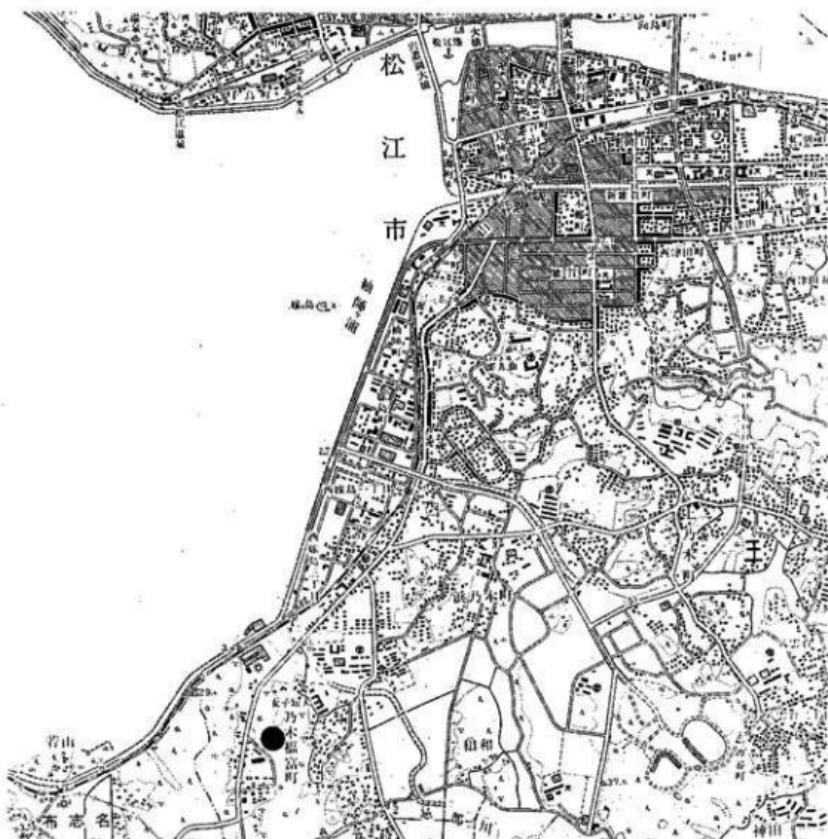
## 目 次

I. 調査に至る経過	今岡一三	1
II. 位置と歴史的環境	"	3
III. 調査の概要	"	5
〈調査区の設定〉	"	5
A トレンチ	"	6
B トレンチ	"	6
C トレンチ	"	6
D トレンチ	"	6
E トレンチ・SD01	"	7
F トレンチ	"	7
SI-01	"	7
弥生土器	"	11
石 器	青木 博	15
砥 石	"	17
鉄 製 品	"	17
〈廻田古墳〉	"	20
墳 丘	"	24
周 溝	"	24
土 拭	"	25
出土遺物	"	25
古墳の築造時期について	"	27
IV. 小 結	今岡一三	28

## I. 調査に至る経過

廻田遺跡は、松江市乃木福富町字廻田707番地及び710番地に所在する。

昭和61年4月に有限会社西尾商事から福富団地造成工事の計画が出されたため、同年4月14日に当教育委員会が工事区域内の分布調査を実施したところ、計画区域内に埋蔵文化財は該当しなかったので、同年5月9日に開発予定者宛にその旨を回答した。しかし昭和62年6月に至り、伐開及び造成工事中に古墳1基を発見したとの届出があり再び計画区域



第1図 調査位置図

内を踏査したところ、その他に遺物散布地1ヶ所を発見した。その後、埋蔵文化財の取り扱いについて開発予定者側と協議を重ねた結果、工事中の発見であったため工事区域の変更が不可能であり、また遅くとも昭和62年9月中には工事を完了しなければならない等で、早急に発掘調査を実施せざるを得なくなつた。協議の末、昭和62年7月、8月の2ヶ月間にわたり調査を実施する事となり、同年7月16日から同年8月11日まで計19日間を要して行なつた。



第2図 周辺の遺跡分布図

## II. 位置と歴史的環境

当地区周辺には数多くの遺跡が所在しているが、発掘調査の行なわれたものは少ない。廻田遺跡は松江市の南西部、乃木福富町字廻田707番地及び710番地の北方へ突き出た低丘陵尾根先端部に位置し径8m、高さ80cmの円墳1基と、この古墳の南側平坦面で検出した弥生時代後期の円形竪穴住居址1棟からなる。

周辺の弥生時代の遺跡は福富湖岸遺跡、欠田遺跡、神立遺跡、友田遺跡等がある。欠田遺跡は弥生時代前期～古墳時代前期の土器とともに石庖丁が出土しており、この事から当地区周辺では弥生時代前期頃から水稻耕作が開始されたことをうかがわせる。

友田遺跡は弥生時代中期中葉から後期後半にかけての土墳墓や四隅突出型を含む墳丘墓、石囲い墓が集合して築かれていた。この内、四隅突出型墳丘墓については山陰地方に類例の多いものであり、その中でも友田遺跡の四隅突出墳丘墓は古い段階のものに属している。またこの様に3つの形態の異なる弥生時代の墳墓が集合しているのは山陰地方では類例に乏しいもので、石見地方山間部～広島県地方にかけて類似の遺跡が認められる。

古墳時代に入ると、古式の須恵器を出土した後友田古墳と方墳2基からなる二名留古墳群などの小規模な古墳群や、全長61.5mの大型の前方後円墳1基と径10～16mの小規模な方墳と円墳5基からなる大角山古墳群、前方後方墳1基、前方後円墳2基、方墳8基、円墳2基からなる大規模な田和山古墳群等がある。また弥陀原横穴群・松本横穴群なども見られる。大角山古墳群と二名留古墳群の中間に古墳時代中期頃の玉作跡5棟を検出した大角山遺跡があり、古墳時代中期頃の玉作生産について大いに期待されるところである。

奈良時代以降のものはほとんど見られず、中世末～近世初頭の松本修法壇跡が見られるだけである。

このように乃木福富地区周辺には今のところ縄文時代の遺跡は見られず、弥生時代～古墳時代にかけての遺跡が多数分布している。欠田遺跡や友田遺跡等から見て、当地区では弥生時代前期頃から水稻耕作が開始され、中期以降になると地域の共同体を統括する首長が誕生してきたことがうかがえる。これが古墳時代になると、県内でも最大級に数えられる古墳が築かれるほどの経済力の豊かな地域へと発展していったと思われる。

奈良時代以降の遺跡は現状ではあまり見られないため、当地区では弥生時代において地域的な政治的・経済的基盤が形成され、古墳時代において発展するが、奈良時代以降衰退していったことを示している。

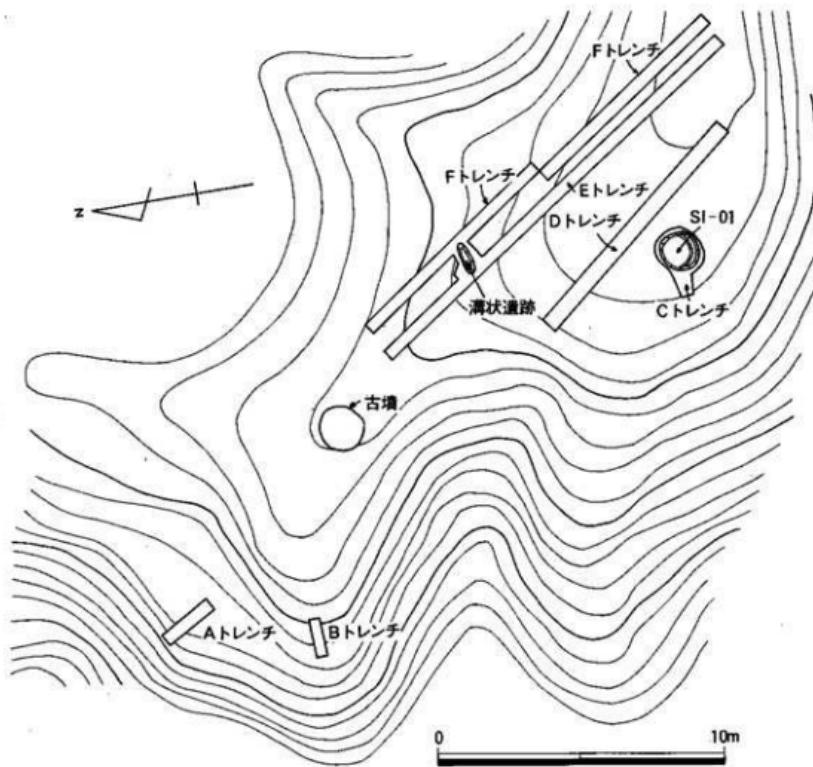
第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	名 称	所 在 地	種 別	概 要
1	廻田 遺跡	松江市乃木福富町		
2	二名留古墳群	〃 二名留	古 墳 群	方墳2基
3	大角山 遺跡	〃	住 居 跡	
4	大角山古墳群	〃	古 墳 群	6基(前方後円墳・方墳・円墳)
5	福富湖岸遺跡	〃	散 布 地	石 槍
6	欠田 遺跡	〃	〃	石庖丁、石鎌、弥生式土器他
7	神立 遺跡	〃	〃	弥生式土器
8	福富Ⅰ 遺跡	〃	〃	石 斧
9	蓮華垣 遺跡	〃	〃	石臼、叩き石
10	屋形 遺跡	〃	〃	砥石、石斧、須恵器
11	松本 遺跡	〃	玉 作 跡	めのう、須恵器
12	福富Ⅱ 遺跡	〃	散 布 地	石 斧
13	乃白玉作跡	〃 乃白町袋尻	玉 作 跡	砥 石
14	松本修法壇跡	〃 松本	修法壇跡	修法壇、五輪塔
15	乃白權現遺跡	〃	玉 作 跡	めのう片、土師器、須恵器
16	弥陀原横穴群	〃 松本	横 穴 群	3穴、石棺、須恵器
17	松本横穴群	〃 〃	〃	約10穴
18	岩屋口古墳	〃 岩屋口	古 墳	横穴式石室
19	乃白 遺跡	〃	散 布 地	石 斧
20	薬師前遺跡	〃 薬師前	〃	弥生土器、土師器、須恵器
21	田和山古墳群	〃 乃木福富町田和	古 墳 群	13基(前方後方墳1、前方後円墳2、方墳8、円墳2)
22	後友田古墳群	〃 浜乃木町	〃	円 墳
23	友田 遺跡	〃	墳 墓	土壇墓、墳丘墓、貼石方形墓
24		〃	古 墳 群	4基、方墳

## Ⅲ. 調査の概要

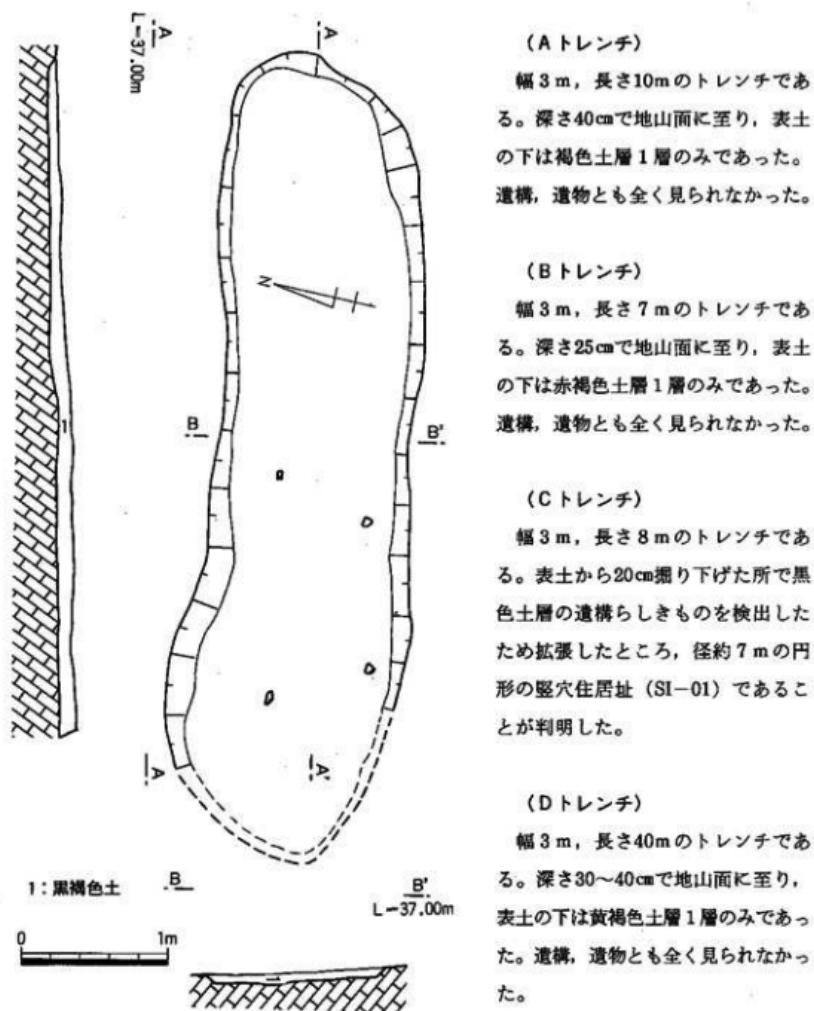
### 〈調査区の設定〉

廻田遺跡は北西方向に長くのびる低丘陵尾根上、標高40~35mの所に位置し、その丘陵先端部に径約8mの円墳1基が築かれていた。その周辺部においても遺構が存在している可能性が考えられたので、古墳の西側斜面に幅2m、長さ10m(Aトレンチ)と7m(Bトレンチ)のトレンチを2本入れ、また古墳の南側約100mの所に広範囲の平坦面があり、そこで弥生土器を表探したことから何らかの遺構の存在が考えられたためそこにも幅3m、長さ8mのトレンチ(Cトレンチ)を入れた。Cトレンチで黒色土層の遺構らしきものが



第3図 調査区域図

認められたため拡張したところ径約7mの円形の竪穴住居址を検出した。その為まだ他にも住居址が存在しているものと思われたので、幅3m、長さ40m(Dトレンチ)、80m(Bトレンチ)、幅2m、長さ80m(Fトレンチ)のトレンチ3本を入れて調査を開始した。



第4図 SD-01実測図

#### (E トレンチ)

幅3m、長さ80mのトレンチである。深さ30~40cmで地山面に至り、表土の下は黄褐色土層1層のみであったが、トレンチの北側で東西方向にのびる溝状遺構(SD-01)を検出した。

#### (SD-01)

幅1.4~1.7m、長さ5.6m、深さ12cmを測る長楕円形の溝状遺構である。埋土は黒褐色土層1層のみで、遺構内からは弥生土器が數片出土している。実測可能であったものは次の2片であった。1は器台の脚台部である。筒部と脚台部の境に稜をもち、外反しながらハの字状に開く。壠壙部は丸い。側面に14条の平行沈線文が施されている。内面はヘラ削りが施され、端部はナデている。筒部外面はヘラ磨きが施されており、外面全体に赤色顔料が塗布されている。径13.3cm、黄橙色で砂粒を多く含む。2は器台の受け部片である。筒部からやや外反しながら立ちあがる口縁部をもつ。外面に5条の凹線文を施す。黄橙色で砂粒を多く含む。

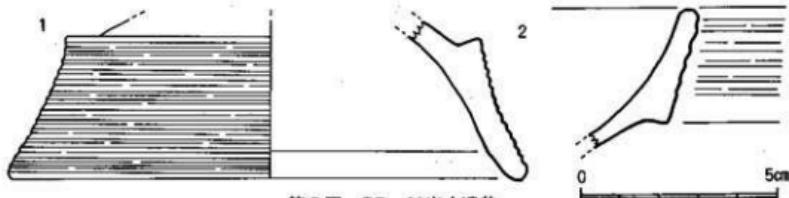
これらの土器から見てSD-01の時期は九重式の頃にあたるものである。また性格については判断できなかった。

#### (F トレンチ)

幅2m、長さ80mのトレンチである。深さ30~40cmで地山面に至り、表土の下は黄褐色土層1層のみであった。トレンチの北側でEトレンチで検出したSD-01の東端部分を確認し、弥生土器も少量出土している。

#### SI-01

Cトレンチで検出した住居址である。住居内には柱穴9個、土壤3個と内壁に沿ってめぐっている溝及びその内側、北西から北東にかけてめぐる溝を検出した。この内側の溝は



第5図 SD-01出土遺物

柱穴によって切られていることから住居を拡張したことを示している。拡張の前後で床面のレベル差はなく、拡張前のものをSI-01 aとし、拡張後のものをSI-01 bとした。

(SI-01 a)

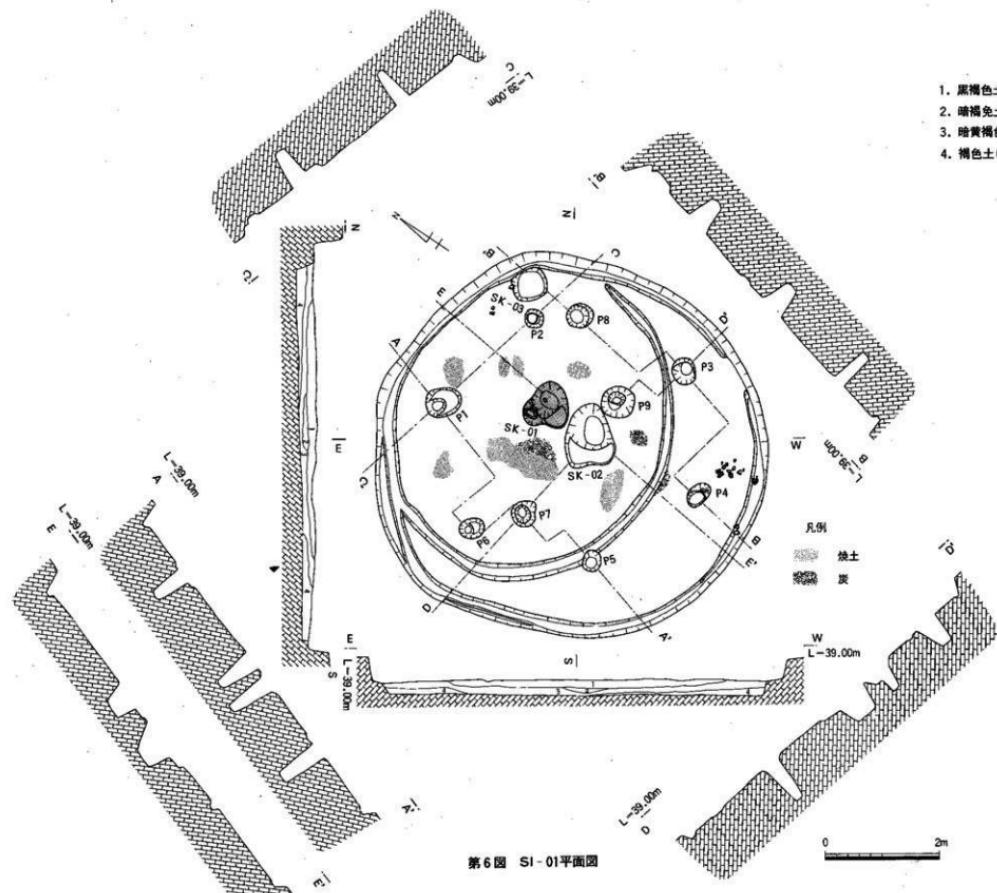
平面形は円形を呈し、南北軸5.0m、東西軸5.6mを測る。柱穴はP1,P2,P7,P9の4本が主柱穴となるものと思われる。P1は径62×52cm、深さ62cm、P2は径34×32cm、深さ60cm、P7は径44×40cm、深さ66cm、P9は径56×58cm、深さ80cmを測る。各柱穴距離はP1から右回りで2.3m, 2.1m, 2.5m, 2.4mでやや不定形となる。南側周溝部分は拡張の際削平を受けたものと思われ、幅14～20cm、深さ4cmで途中切れるもののはば全周する。

(SI-01 b)

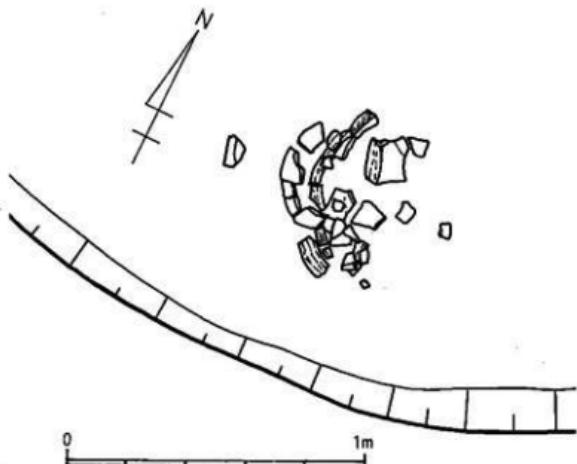
平面形はSI-01 aの平面プランを踏襲してそのまま拡張したもので、円形を呈している。南北軸6.6m、東西軸7mを測る。壁高は北東側で最大値32cmを測り、南西へ向うにつれて低くなり最大値15cmを測る。この内壁に沿って幅10～20cm、深さ4～8cmのU字状の溝が、西側で途中途切れるもののはば全周している。柱穴はP1,P3,P4,P5,P6,P8の6本が主柱穴となるものである。P1はSI-01 aのものを再利用している。P3は径44×40cm、深さ60cm、P4は径48×30cm、深さ66cm、P5は径38×30cm、深さ73cm、P6は径36×42cm、深さ72cm、P8は径42×46cm、深さ50cmを測る。各柱穴距離はP1とP8間が2.8mを測る以外2.3mではば一定している。

床面中央部と壁側で土壌を3個検出した。中央のものをSK-01、その南側をSK-02、北壁側のをSK-03とする。これらの土壌がSI-01 aと01 bのどちらに付属していたのかは、断定できないが、配置状況からSK-01は01 bに、SK-02は01 aに所属するものと考えられる。SK-01の平面形は不整形で西側が2段になっている。東西80cm、南北80cm、深さ34cmを測る。土壌内は焼けしており、底部から約18cmの厚さで炭、焼土が堆積していた。また弥生土器2片が出土している。SK-02の平面形は不整形で西側が2段になっている。東西86cm、南北1.1m、深さ45cmを測る。底部付近で炭を少量検出した。SK-03の平面形は隅丸方形を呈し、東西60cm、南北60cm、深さ10cmを測る浅めの土壌である。これらの土壌がどのような性格をもつものなのか不明であるが、SK-01のみは壙内が焼けていることなどから、炉のような用途に使用されたものの可能性が高い。またこれらの土壌の周りに炭と焼土面が数ヶ所認められた。床面及び覆土中からは多量の弥生土器や石器類等が出土している。

1. 黒褐色土(炭、土器を含む)
2. 喜福免土(炭、多量に含む)
3. 暗黄褐色土( )
4. 棕色土( )



第6図 SI-01平面図



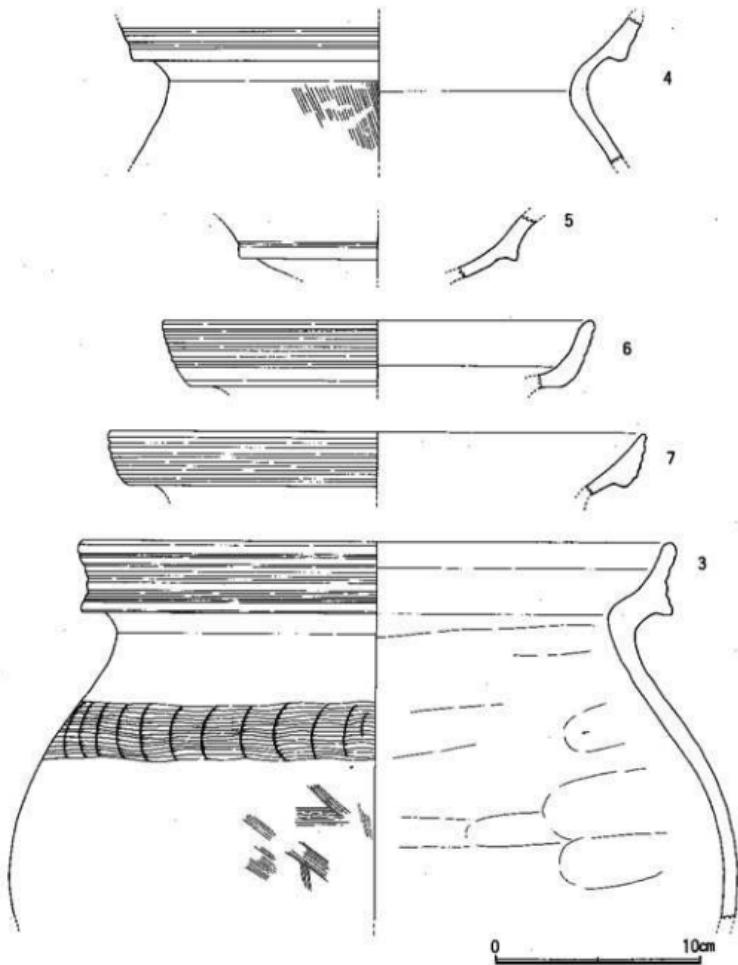
第7図 SI-01内土器出土状況図

### 弥生土器

3, 4, 5は床面直上から、6, 7はSK-01内から出土した土器である。3は胴部半分まで残っている複合口縁の甕である。口縁部は内湾ぎみにのびた後外傾して端部に至る。肩は張らず胸部中央に最大径がある。口縁部外面に5条の凹線文を施す。肩部外面には貝殻

腹縁による平行沈線が刺突状に施され、その下はハケ目が施される。口縁部内面はヨコナデ、下半部はヘラ削り、口径は29.0cm、黄褐色で砂粒を少量含む。4は口縁端部を欠く複合口縁の甕である。口縁部は外傾してのび、2条以上の凹線文を施す。肩部外面ハケ目以外調整不明。暗黄色で砂粒少量含む。5は高杯の坏部である。浅い体部に断面三角形の下向きの稜がつく。稜下半はヨコナデ、それ以外は不明。内面淡黄灰色、外面橙褐色で1mmまでの砂粒を多く含む。6は内湾ぎみにのびる複合口縁の甕の口縁部であり、頸部と口縁部の境に稜をもっていない。外面に5条の凹線文を施す。口径21.0cm、暗橙色で3.5mmまでの砂粒を多く含む。7も甕口縁部で、口縁部は頸部から下向きに折れ曲った後内湾ぎみに外傾してのびる複合口縁である。内面に段を作らない。外面に5条の凹線文を施す。口径26.0cm、内面黄橙色、外面橙色で1.5mmまでの砂粒を含む。この6と7はやや特異な形態をもつ口縁部である。

8~11は第3層目から出土した壺甕類の口縁部で、11以外は外傾する複合口縁部である。8と11は4~5条の凹線文を施しているが、9, 10は平行沈線文で9は沈線が重なっている。8は口径16.4cm、暗黄褐色で2mmまでの砂粒を少量含む。9は口径16.8cm、暗褐色で1.5mmまでの砂粒をやや多めに含む。10は口径16.0cm、暗褐色で頸部以下ハケ目を施す。11はヨコナデが施される。12~20は第2層目から出土した土器である。12~16は壺甕類の口縁部、17, 18は壺甕類の底部、19, 20は高杯の坏部と脚裙部である。12は「く」の字状の頸部から垂直ぎみにのびる複合口縁部で、外面には7条の平行沈線を施す。内面はヨコナデさ



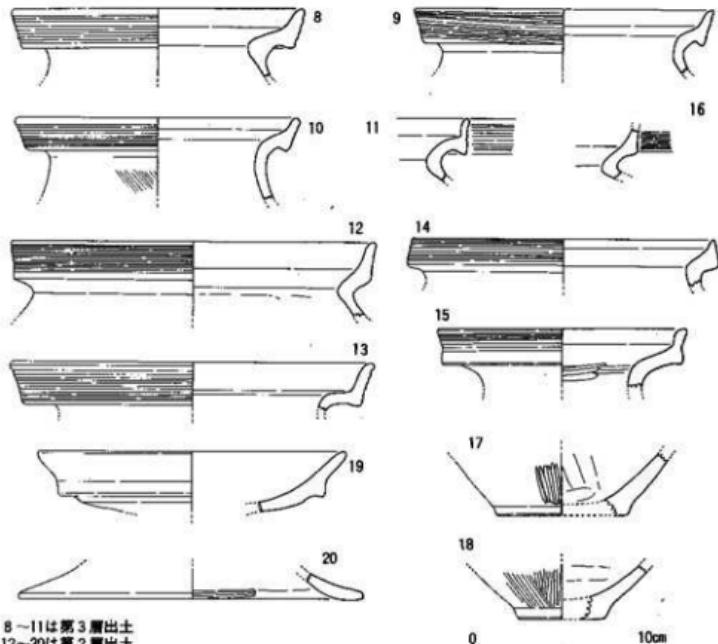
第8図 SI-01床面出土遺物

れ頸部以下ヘラ削り。口径20.4cm, 暗橙色で2mmまでの砂粒を多く含む。13は横方向に大きく聞く頸部からやや外傾してのびる複合口縁をもち、端部は外に若干肥厚する。外面に6条の凹線文を施す。口径20.4cm, 灰褐色で2.5mmまでの砂粒を多く含む。14は内傾して短くのびる複合口縁で、5条の平行沈線を施している。口径17.0cm, 暗黄橙色で2mmまでの砂粒を多く含む。15は内弯した後外傾してのびる複合口縁で、3条の凹線文を施す。口

縁部内面ヨコナデ、頸部内面ヘラ磨き、頸部外面ヨコナデ。口径14.0cm、橙褐色で密。16は口縁端部を欠き、5条以上の平行沈線文が施されている。頸部内面以下ヘラ削りされ、暗橙色で2mmまでの砂粒を多く含む。17はしっかりした平底である。外面はヘラ磨き、内面ヘラ削りが施されている。底径7.6cm、橙褐色で1.5mmまでの砂粒を少量含む。18は底径4.8cmの平底である。外面ハケ目、内面ヘラ削り。黄褐色で密。

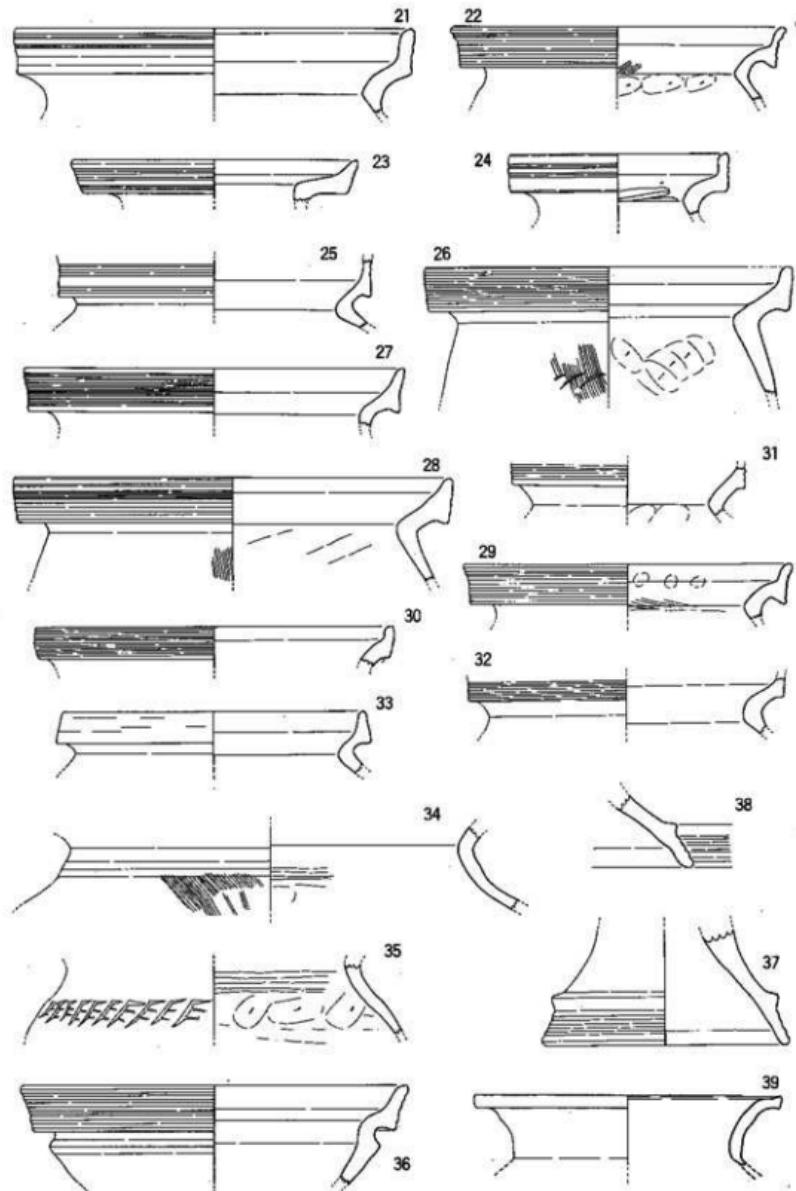
19は底部と口縁部の境に下向きの稜をもち、稜と底部の境に浅いへこみをもつ。口径17.4cm、黄褐色で3.5mmまでの砂粒を多く含む。20は高杯の脚根部片で、内面端部付近ヘラ磨き、その他ヘラ削り、外面は不明である。径19.5cm、褐色で密。

21～38は第1層目から出土したものである。21～25は凹線文、26～32は平行沈線文を施した複合口縁の壺甕類である。21は垂直ぎみにのびる口縁部をもち、頸部との境に稜をもたない。4条の凹線文。口径21.0cm、暗黄橙色で3mmまでの砂粒を少量含む。22はやや外反ぎみにのびる口縁部で5条の凹線文を施す。口縁部内面ヨコナデ、頸部以下ヘラ削り。肩部外面ハケ目を施す。口径17.5cm、黒色で3mmまでの砂粒を含む。23は横方向に大きく



8～11は第3層出土  
12～20は第2層出土

第9図 SI-01覆土中出土土器



第10図 SI-01第1層出土土器

0 10cm

開く頸部から外傾してのびる短い口縁部をもち、3条の凹線文を施す。内面はヨコナデされている。口径15.0cm、暗黄橙色で2mmまでの砂粒を多く含む。24は小型の壺である。垂直にのびる口縁部をもち、2条の凹線が施される。口縁部内面ヨコナデ、頸部ヘラ磨き、頸部以下ヘラ削りが施される。口径11.6cm、暗黄褐色で1mmまでの砂粒を少量含む。25は端部を欠くが、下向きの稜をもっている。2条以上の凹線を施す。暗黄褐色で粗。26は「く」の字状の頸部から垂直にのびる口縁部をもち、6条の平行沈線を施す。口縁部内面ヨコナデ、頸部以下ヘラ削り。体部外面貝殻腹縁によるハケ目。口径19.4cm、暗橙色で2mmまでの砂粒を少量含む。27は口縁部はやや外反ぎみにのび、8条の平行沈線を施す。口径20.0cm、暗黄橙色で1.5mmまでの砂粒を多く含む。28は垂直ぎみにのびる口縁部で6条の平行沈線を施す。肩部外面ハケ目、肩部内面ヘラ削り。口径23.0cm、褐色で密。29は外反ぎみにのびる口縁部で5条の平行沈線を施す。やや鋭い下向きの稜をもつ。口縁部内面ヨコナデで指頭圧痕が残る。頸部ハケ目、頸部以下ヘラ削りが施される。口径17.4cm、暗黄橙色で1.5mmまでの砂粒を少量含む。30は短くのびる口縁部に6条の平行沈線を施す。口径18.8cm、黄灰色で1mmまでの砂粒を多く含む。31,32は端部を欠くもので、頸部以下ヘラ削りを施す。橙褐色で2mmまでの砂粒を多く含む。33は内傾する短い口縁部であるが磨滅が著しい。口径15.8cm、暗黄色で3.5mmまでの砂粒を多く含む。34,35は胴部片であり、35の外面には板状工具による押し引き痕がある。36は高杯か鉢の口縁部である。口縁部は外傾してのび5条の凹線文を施す。頸部は小さく深めのもので、肩部にやや鈍い稜を作っている。口径20.4cm、内面暗黄褐色、外面赤褐色で1.5mmまでの砂粒を含む。37,38は器台の脚台部で4条の凹線文を施している。34は脚径13.2cm、暗橙色で2mmまでの砂粒を少量含み、外面に赤色顔料が塗布されている。38は外面ヨコナデで赤色顔料塗布。内面端部付近ナデ、それ以外はヘラ削りされている。暗橙色で粗。

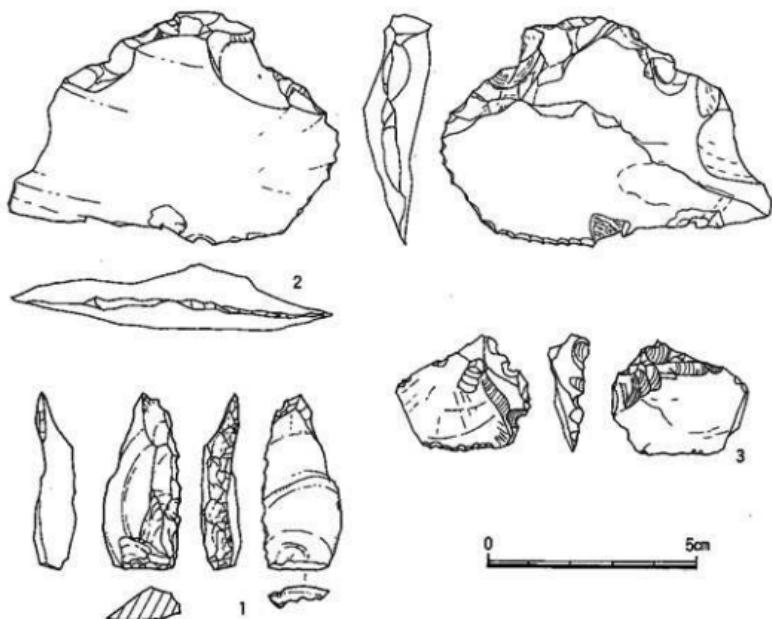
これらの土器から見て、本住居址は弥生時代後期後半を中心とする時期と思われる。

また、これらの土器以外に住居址検出面上層から須恵器壺片1片と住居址床面及び覆土中から石器、鉄製品等が出土している。

39は須恵器の壺口縁部である。口縁部は外反してのび端部付近で屈曲する。口縁端部は上下に肥厚する。口径16.2cm、白灰色で密。

## 石 器

1は玉髓（赤メノウ）のナイフ形石器で第2層目から出土したものである。最大長4.2cm、最大幅1.9cm、最大厚0.9cmを測る。剝片剥離のあまりすんでいない石核より剥取し



第11図 SI-01内出土石器実測図

た縦長剝片素材に主要剝離面右側を調整剝離して形を整えたもので、刃部は第1次剝離時にできた部分をそのまま使用している。あまり刃こぼれがなくシャープであり、平坦な打面を残している。旧石器時代のものと考えられる。

2は細粒凝灰岩のスクレーパーである。最大長5.6cm、最大幅7.9cm、最大厚1.4cmを測る。石匙状を呈する。主要剝離面裏側に半分以上の自然面が残る。裏側下部の剝離は使用による剝離なのか、刃こぼれなのか不明である。3は最大長2.7cm、最大幅3.2cm、最大厚1.0cmを測る。主要剝離面下部に使用による剝離がみられる。上部には打面と思われる自然面を残す。裏側上部の剝離は調整剝離とは思われない。4～20は黒曜石の剝片である（第2表）。

第2表 黒曜石剝片一覧表

(単位: cm)

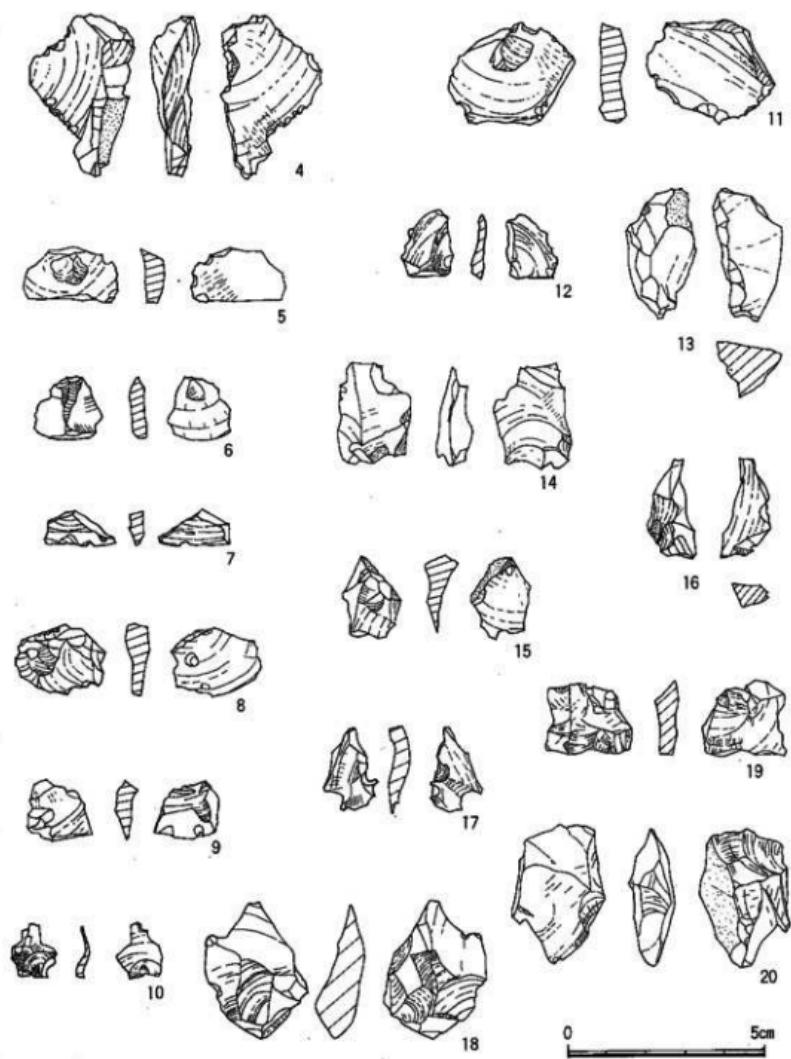
番号	出土土層	最大長	最大幅	最大厚	備考
4	床面	4.1	2.6	1.2	自然面(打面)を残す
5	〃	1.3	2.3	0.5	自然面(打面)を残す
6	第2層	1.6	1.6	0.3	
7	第1層	0.9	1.7	0.3	
8	第2層	1.8	2.2	0.6	上部剝離痕は新しい
9	〃	1.6	1.6	0.4	
10	〃	1.4	1.1	0.2	
11	床面	2.2	3.1	0.6	上部に打面を残す
12	第2層	1.6	1.3	0.3	わずかに打面を残す
13	〃	3.4	1.7	1.4	
14	第1層	2.5	1.8	0.8	
15	〃	2.0	1.5	0.9	自然面(打面)を残す
16	〃	2.5	1.2	0.6	
17	〃	2.1	1.3	0.4	
18	(上層)	3.5	2.5	1.0	
19	第4層	1.8	2.1	0.6	
20	第1層	3.5	2.2	1.1	自然面を残す

## 砥石

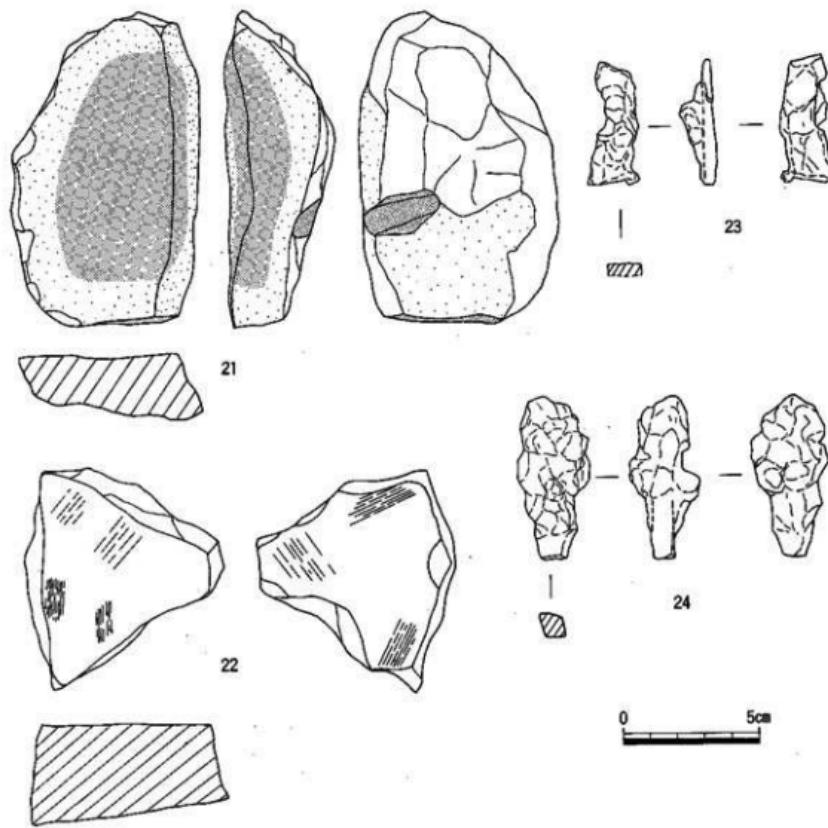
21は最大長11.4cm、最大幅6.8cm、最大厚2.4cmを測り、平面形は半橢円形である。石材は砂岩質のものである。4面とも使用しているが、とくに2面ばかりの使用頻度が高く、中央部がへこむ程磨り減っている。22は多孔質のもので、断面は直方体を呈する。表裏2面を砥面とする。両面ともに細かい斜行状の研磨痕が残る。

## 鉄製品

23,24の2片である。いずれも種類は不明である。23は断面1.2cm×0.4cmの長方形で残存長4.5cmである。24は断面0.8cmの平行四辺形で、残存長6.0cmのものである。



第12図 SI-01内出土石器実測図

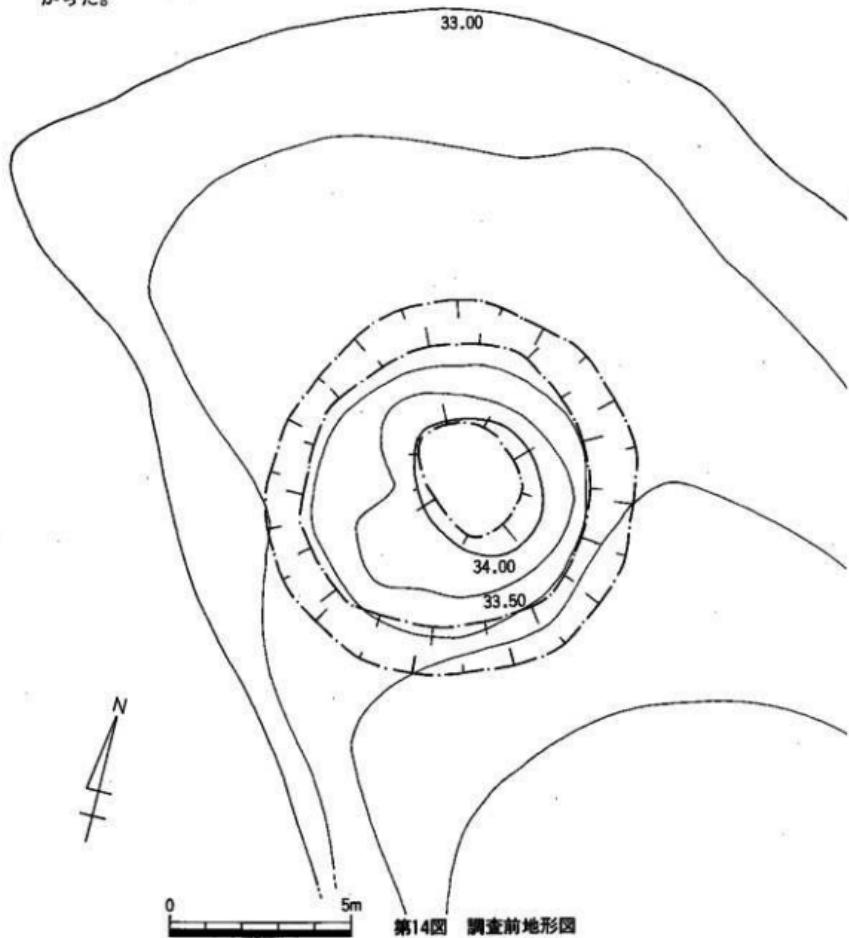


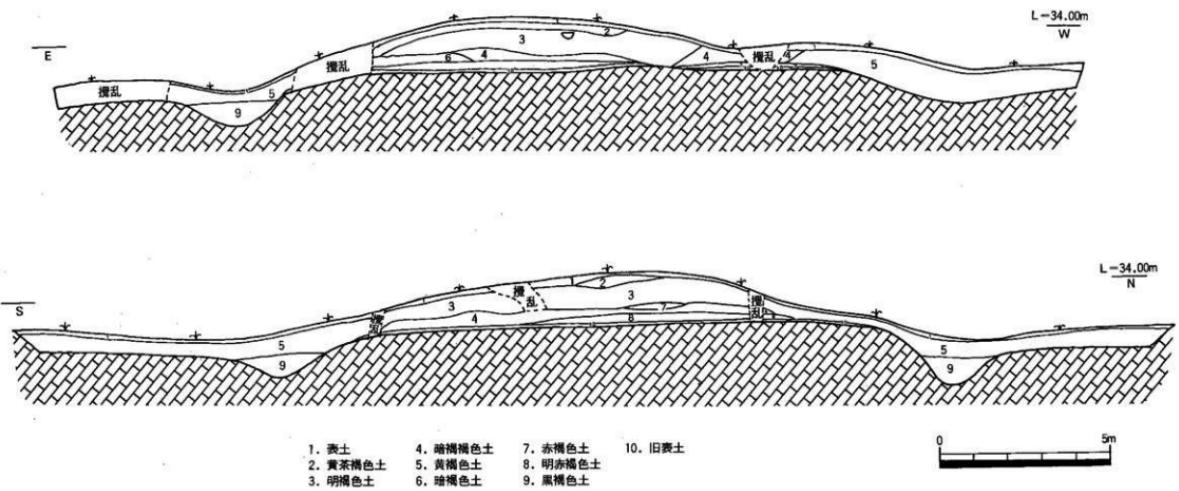
第13図 SI-01内出土石器鉄器実測図

## 廻田古墳

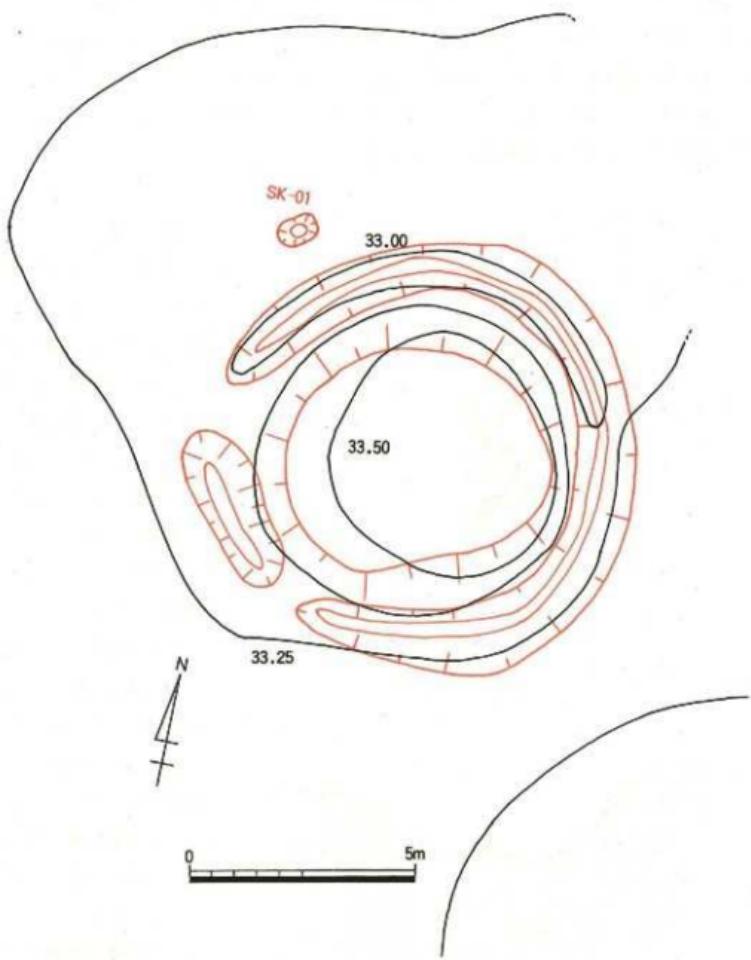
調査前は、径約8m、高さ80cmほどの円墳で、周りに周溝ではないかと思われる幅1m、深さ10~20cmほどのくぼみがめぐっていた。また、墳頂部の西側が、かなり削平された状態であった。

調査の結果、周溝と周溝の外側1mの所で土括1個を検出したが、主体部は検出できなかった。





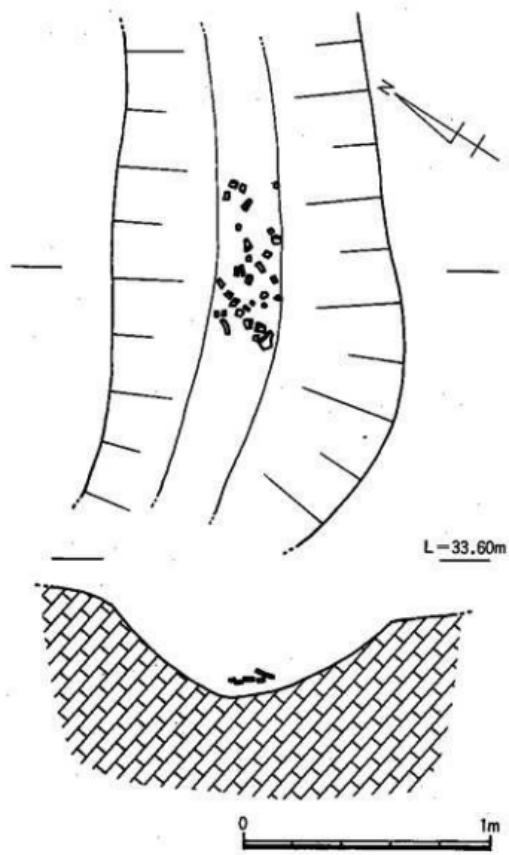
第15図 古墳セクション図



第16図 古墳完掘状況図

## 墳丘

墳丘は、径約8m、周溝を含めた規模は9.8m、高さは周溝の底部から墳丘基盤までの高さが60cm、盛土部分が現残存部分で60cmであり、全体として1.2mになる。墳頂部からの全体の高さは約1mであった。墳丘の構築方法は、旧地表面からまず周溝を掘り、長径6m、短径5mの不整形な円形の墳丘基盤を形成し、さらに周溝の外側を切削加工してから赤褐色土、黄褐色土等を20~30cmほど盛土して平坦部を作っている。次に明褐色土を20~30cm盛土をして墳丘を整えている。この盛土終了時に須恵器の坏蓋が置かれたようだ。さらに盛土をして墳丘を整備したと思われる。



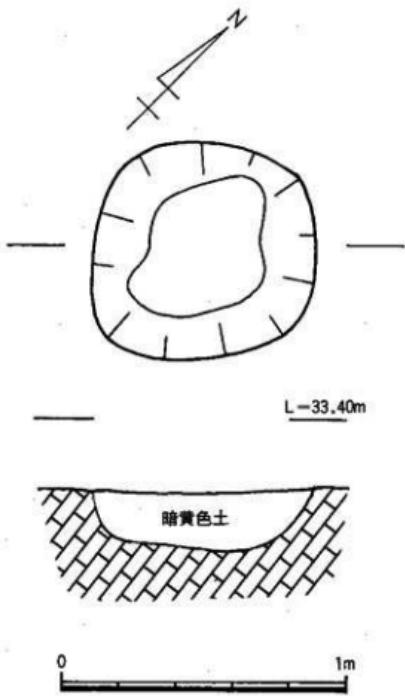
第17図 南側周溝内土器出土状況図

## 周溝

周溝は、古墳全体に一様にめぐっていない。まず西側に長さ4m、幅1.2~1.5m、深さ12cmの浅い断面「U」字状の溝がめぐっている。そしてその両端からそれぞれ1mの間隔をおいて周溝が始まっている。この2箇所の1mの間隔は意識的に“ブリッジ”として作り出されたのかもしれない。周溝は、幅1~1.5m、深さはもっと深いところで約30cmで、断面は「U」字状をなしている。

なお南側周溝の底部付近より、弥生土器片の壺口縁部等、30片近く出土した。

この周溝の特徴は、周溝を古墳全体に一様にめぐらさないで、2箇所ほどの



第18図 SK-01実測図

#### 出土遺物

1. 盛土の第3層上面より出土した壺蓋である。口径約12.7cm、器高5.2cm、口縁高2.5cmを測る。天井部は丸味をもち緩やかに口縁部に移行する。天井部と口縁部の境には丸く退化した稜がある。口縁端部は丸く、内側に段を有する。手法はマキアゲ成形により、調整は天井部外面の天頂部下2mmより約1cmほどに難で強い回転ヘラ削りが施されている。口縁部はヨコナデである。天頂部内面は一定方向のナデが施され、それ以外はヨコナデである。また天頂部外面にスノコ状痕が残っている。色調は、外面薄青灰色～灰色、内面灰白色を呈する。胎土は、4mmの白色系砂粒を含み、焼成は良好である。
2. 南側周溝内より出土した弥生土器の壺口縁である。口径12.2cmを測る。ゆるく屈曲した頸部から垂直に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部外面には3条以上の平行沈線を施している。調整は、外面はヨコナデであるが内面は不明である。色調は、外面内面とも黄灰色を呈する。胎土は密で、0.5mmの砂粒を含む。焼成は良好である。

“ブリッジ”を設けたところにある。この“ブリッジ”が何のために設けられたのかは不明である。

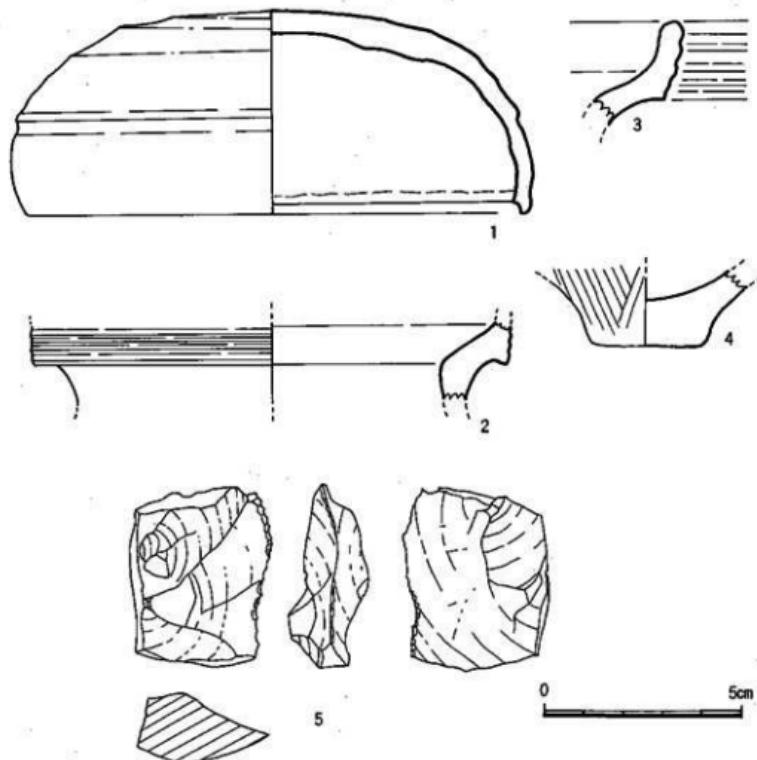
#### 土 拡 (SK01)

SK01は、周溝の北西外側の約1mの所で検出した。SK01は、ややひずんではいるが、1辺80cm、深さ約20cmの隅丸方形のもので暗黄色土の埋め土が入り込んでいた。この土拡からは遺物は何も検出されなかった。

3. 旧表土中より出土した弥生土器の壺口縁である。頸部から内窩気味に外方へ短かく立ち上がる口縁をもつ。端部は丸い。口縁外面には4条の凹線が施されている。色調は、外面は2次焼成を受けて黒色、内面黄橙色を呈する。胎土は密で1mmの砂粒をわずかに含む。焼成は良好である。

4. 旧表土中より出土した弥生土器の底部である。底径2.8cmを測る。小さな平面をもつ底部からわざかに垂直に立ち、それから大きく外反しながら開いて立ち上がる。調整は、外面は縦方向のハケ目調整であるが、内面は不明である。色調は、外面暗褐色、内面黒灰色を呈する。胎土は、やや粗で1mmの白色砂粒を含む。焼成は良好である。

5. 旧表土中より出土した玉髓の剥片である。最大長4.5cm、最大幅3.5cm、最大厚1.8cm



第19図 古墳出土遺物実測図

を測る。主要剝離面上部に平坦な打面が比較的広く残る。平坦打面には打点が3個所確認できる。裏面の剝離痕は、大まかで剝片剝離によるものだろう。主要剝離面裏面下部に使用による細かい剝離が認められる。旧石器時代のものと考えられる。

#### 古墳の築造時期について

古墳の築造時期を決定する主体部が検出できなかったのではっきりしたことは不明だが、最も有力な時期決定の資料は、盛土内出土の坏蓋だろう。この坏蓋は、古墳の築造後に何らかの理由で混入した形跡がみられない。むしろ築造途中の2度目の盛土終了時に置かれた可能性が大きい。この坏蓋は、山本編年のⅡ期に該当するもので、これを目安にすればこの古墳の築造時期は古墳時代後期前半になるものと思われる。

#### IV. 小 結

今回の調査では、古墳 1 基の他に弥生時代後期の竪穴住居址 1 棟と溝状遺構 1 を検出した。島根県内で弥生時代の竪穴住居址の発掘調査例は非常に少なく、現在報告のなされたもので知り得るものは 22 例だけである（弥生時代と古墳時代をどこで区切るのか問題となるところであるが、ここでは一応小谷式以前までを弥生時代としておきたい）。弥生前期では東出雲町の寺床遺跡<sup>17</sup>、中期では安来市の八脇谷遺跡<sup>18</sup>、潜戸山遺跡<sup>19</sup>、松江市の布田遺跡<sup>20</sup>、後期では安来市の大坪遺跡<sup>21</sup>、松江市の平所遺跡<sup>22</sup>などが知られている。これらの遺跡のうちで、鳥取県米子市の青木遺跡<sup>23</sup>や福市遺跡<sup>24</sup>のように多数の竪穴住居址を検出した例は鹿足郡六日市町の前立山遺跡<sup>25</sup>だけであり、古墳時代のものでも松江市の堤廻遺跡<sup>26</sup>、薬沢 A 遺跡<sup>27</sup>などがあるだけである。その他の遺跡は 1 ~ 2 棟の小規模なもので、本遺跡の竪穴住居址もこれらと同様で、1 棟のみであった。このことは広い平坦面をもった低丘陵が余りみられないといった当地方の集落立地条件の制約から来るのかもしれない。しかし、本遺跡では丘陵の頂上に広い平坦面があるにもかかわらず 1 棟のみで、それも平坦面が斜面へうつるあたりに営まれていた。こうしたことは、八束郡玉湯町の鳥坊遺跡<sup>28</sup>のように、丘陵の中央部平坦面を共同の広場として使用し、住居は広場の周囲に営むといったことも考えられるが、今回の調査では 1 棟のみ検出ただけであった。それ故、本住居址の存在する平坦面の南側斜面あたりに他の住居が営まれていた可能性が高いものと思われる。

竪穴住居址の内部施設をみると柱穴以外に使用された土壌があり、これらは從来「特殊ピット」と呼ばれているものであろう。この特殊ピットの性格については、炉址や貯蔵穴、工作用ピット等として様々な考え方がなされている。鳥取県の青木遺跡では、これらの特殊ピットを貯蔵穴や工作用ピットとは見ず、祭祀関係址として考えている。またその形態も時期により精円形から方形二段に変化したり、位置も中央部から壁際へ移動すると理解されている。本住居址では中央部に 2 個、壁際に 1 個検出しており、中央部のピットの 1 つは、境内が焼土面となり、埋土にも焼土や炭が多量に詰り土器片も出土しているが、祭祀関係の遺物が全く見られなかったことなどから、炉のような施設として使用された可能性が強い。また中央部のピットと壁際のピットは、位置、形状、内部の遺存物等の相違から同じ性格のものとは考えにくい。中央のピットは不整円形を呈して柱穴程度の深さをもち、内部も焼けていたり、テラス状の段が作られていることから、青木遺跡や鳥取県大栄町の上種遺跡<sup>29</sup>同様に蓋の存在も考えられるが、壁際のピットは方形を呈し浅い作りのもの

で、周溝と交わっていることに違いが見られるからである。よって壁際の特殊ピットの性格については明確な判断ができなかった。中央部の特殊ピットの周りに焼土や炭の広がりが数ヶ所認められるが、中央の特殊ピットが炉址とするならばこれらの焼土面は暖房や明りのためのものであったかも知れない。

次に住居址床面及び覆土中から出土した弥生土器について考察する。

住居址内から出土した弥生土器は、床面及び特殊ピット内出土のもの5個、覆土中出土のもの31個、総数36個出土している。これらのほとんどが口縁部片のみで、胴部上半までわかるものが1個体だけであった。全体のプロポーションが判明しないので口縁部の特徴を中心としてその所属時期を見していくことにする。また特殊ピットのものは、拡張前の特殊ピットから出土しているが、その土器は特異な形態をしているものの、床面のものにも比較的類似したものが認められ、また、同様の手法を施すことからさほど時期的な差はないものと考えられ、ここでは一応同時期のものとしてとらえておきたい。

まず住居址の時期の決め手となる床面出土の土器を観察すると次のような特徴が認められる。

- ① 口縁部は複合口縁で、外傾してのびるものと内傾した後外傾してのびるものがあり、比較的短い口縁部を有す。
- ② 口縁部外面に4~5条の凹線を施す。
- ③ 口縁部内面に明瞭な段を作らず、頸部までゆるやかに下る。
- ④ 肩部はあまり張らないと思われる。
- ⑤ 口縁部内面はヨコナデが施され、頸部以下ヘラ削りが施される。

以上のような特徴が認められるが、覆土中出土の多くのものにはこのような特徴をもつものがあまり見られない。以下覆土中出土土器の特徴を示すと、

- ① 口縁部は複合口縁であるが、直立ないしやや外傾してのびる口縁部を有す。
- ② 口縁部外面に7~8条の平行沈線を施す。
- ③ 口縁部内面に明瞭な段を作るものが多く見られる。

このような特徴が見られ、明らかに床面出土のものと違う様相を示している。しかしながらこの違いが時期的な幅をもつものなのか明確に判断できかねるが、床面出土のものに多条の平行沈線を施すものが見られず、凹線文を主流とするものばかりであり、口縁部の形態にも違いが認められるため、若干の時期的な差があるものと考えられる。後者のような特徴をもつものは従来の編年で言うところの「九重式」<sup>11</sup>の範疇に含まれるもので、前者のような特徴をもつものについてはあまり類例が知られていない。前者のものは少なくとも

後者のものより古い要素をもっているため、従来いわれている九重3号墓を標式とする九重式の諸要素よりも先行する特徴を有するものと考えられる。しかし、出雲市の矢野遺跡などに見られる弥生時代後期前半の特徴であるくりあげ口縁をもつものは認められないで、弥生時代後期前半までは遡らないものようである。覆土中出土の土器を弥生時代後期後半の九重式土器に含まれるものとすれば、床面出土のものは弥生時代後期前半までは遡らないものの、弥生時代後期の中頃か、後期後半の中でも相対的に古く位置付けることができるのではないかろうか。いずれにしても、本遺跡の竪穴住居址出土の土器群は、九重3号土墳墓出土の一括土器群をもって設定されてきた弥生時代後期の土器編年に対して、貴重な資料となるものと思われる。

竪穴住居址内出土遺物は弥生土器の他に石器類や鉄製品が出土している。この中で旧石器時代のナイフ形石器が出土しており、県内では出土例が極めて乏しいものであるため注意をひいた。のことから本遺跡の周辺には旧石器時代の遺構の存在が考えられたが、それを検出することはできなかった。

溝状遺構について、その性格は不明であった。時期は出土土器から見て九重式頃と思われるが、これが本住居址と関わりをもっていたのかどうか判断できなかった。

廻田古墳については主体部を検出することができなかった。これは古墳の西側が削平を受けていたため、主体部はその時に消滅したものと考えられる。古墳築造時期については主体部は消滅していたものの墳頂部から須恵器の坏蓋が1個体出土しているので、この坏蓋から見ると山本編年のⅡ期頃に造られたと考えられる。また周溝は全周せず途切れでブリッジ状のものを造っていた。このブリッジ状のものがどのような性格をもつものなのか今後の類例を待って検討したい。

以上、本遺跡で検出した竪穴住居址を中心に述べてきた。先述した通り島根県内の住居址調査例は少ないものであり集落としてまとまったものもあり見られず、2~3棟で営まれているものが多い。本遺跡の住居址も1棟だけではなく調査区域外にまだ多数の住居が存在しているものと考えられる。また本住居址は拡張が行なわれているが、拡張前の時期については詳細にはわからなかった。拡張の理由としては人員の増加と経済力の向上が考えられるであろう。今後住居址の調査が増加して竪穴住居の構造、集落のあり方について検討する必要があろう。

第3表 弥生時代竪穴住居址発掘遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	棟数	堤 級	形態	時 期	文 献
1	菅戸山遺跡	安来市沢町唐戸山	2棟	1号 6.0×5.4m 2号 5.4×3.0m	楕円形	中期～後期	内田才「歴史・古代」 『安来市誌』昭和50年
2	八幡谷遺跡	安来市大塙町殿内	3棟	1号 1.32×2.5m 2号 直径5.5m 3号 1.32×5.5m	楕円形 内方形ないし椭円形 方 形	中 期? 後 期?	*
3	大坪遺跡	安来市早田町字大坪	1棟	直径 5.2m	円 形	後期前半	島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内歴史文化財免査査査報告書』 昭和51年3月
4	高広遺跡	安来市原井町長堀	5棟	1区 SI-01 直径5.4m 2区 SI-01 径5.9m SI-02 SI-03 SI-04	円形に近い椭円形 円 形 方 形 2間ないし3間の柱 穴開口段、穴住穴	中期中葉 後期後半 古墳時代前期 後期後半 中期後葉～	島根県教育委員会『高広遺跡免査査査報告書』 昭和54年3月
5	叶谷遺跡	安来市早田町叶谷	3棟 1号	直徑6.8m 1号 1.32×4.3m 2号 西面壁9m	楕円形 楕円形	的場式 古墳時代前期	三宅博士「叶谷遺跡」「島根県 立派な古墳遺跡を有する、第2集」 島根県教育委員会、 昭和50年3月
6	宮山古墳	安来市西庄町	1棟	5.4×5.6m	楕円形	後尾 ～	安来市教育委員会『宮山古墳』 昭和45年
7	寺家遺跡	東出町御堂	3棟	SI-01 直径 4.4m SI-02 3.8m SI-03 *	円形しくは椭円形 円 形	初期末 中期後葉	東出町教育委員会『寺家遺跡 調査報告書』昭和58年3月
8	勝負遺跡	松江市東深田町	4棟 1号	SI-03 5.4×4.92m SI-04 3.8×3.7 (SI-05 3.8×3.7) (SI-06 3.8×3.7)	楕円形 楕円形	九頭式～圓尾 1	島根県教育委員会『国道9号線 バイパス建設予定地内歴史文化 財免査査査報告書』 昭和58年3月
9	吉田遺跡	松江市竹矢町吉田	6棟	SI-02 SI-01～04 2.90～3.60m 4段より2段?	楕円形	中期中葉～後葉	*
10	平所遺跡	松江市矢田町字平所	4棟	1号 5.3×2.5m 2号、3号不明 五工房跡 1.35×5.7m	円形に近い椭円形 楕円形	後尾 1 後尾 1 *	島根県教育委員会『国道9号線 バイパス建設予定地内歴史文化 財免査査査報告書』『I』昭和 51年
11	長谷遺跡	松江市竹矢町	1棟	直徑4.2m	円 形	中期末～後期前半	松江市教育委員会『竹矢後ノ 今根、大谷遺跡』 昭和50年3月
12	黒田城遺跡	松江市大庭町字宇居	1棟	直徑4.6m	円 形	後 期	島根県教育委員会『黒田城の丘 内古墳調査報告書』 昭和52年5月
13	玉造山房遺跡	玉置町大字玉造 牛島	2棟	1号 4.8×4.7m 2号 4.2×4.05m	楕円形	圓尾 1	三島博士「玉造山房跡」昭和45年3月
14	出雲玉作跡	玉置町大字玉造 牛島	7棟 2棟	1号 4 m 1号 5.7m (その他古墳時代)	楕円形	圓尾式	島根県教育委員会『元治山房五 作跡古墳調査報告書』1972年
15	高反遺跡	隠岐郡大字高反 横寺	1棟	3間×3間の独立柱建 物	弥生後葉～古墳時代	島根県教育委員会『高反遺跡』 昭和60年3月	
16	日赤田遺跡	横寺町福原日赤田	2棟	1号 5.5m以上 2号 4.6×4.8m	方形 楕円形	的場式	東瀛市長「日赤田町日 赤田遺跡の調査」『奈良文化史』 昭和64年
17	岩谷遺跡	横田町岩谷	1棟	1個既存	円 形	的場式	『奈良山房考古学研究会集 録』昭和56年8月9、10日
18	岡竹遺跡	岡田町大字裏岡	7棟 6棟	1号 4.5×4.5m 2号 4.0×3.0m 3号 6.0×6.0m 4号 4.5×4.5m 5号 4.0×4.0m 7号 4.5×4.5m 6号 平地式住居址	楕円形 楕円形 円 形 円 形 円 形 円 形	古墳時代後半? 弥生時代中期 “	「中・古竹遺跡古墳免査査査資料」 昭和52年7月26日 島根県教育委員会「島根県文化財 研修会資料」昭和53年2月26日
19	須磨原遺跡(A、B)	邑智郡須磨町下 龜谷	2棟	A 直径4.8m B 1.65×1.65m	円形楕円形	弥生後期	門脇俊作「古代史・資料編」 『境町誌第1集』昭和36年、 門脇俊作「古代社会の成立」 『第三・邑智郡』昭和51年
20	夷尾原遺跡	邑智郡昭和町	3棟 1棟	3 m × 3 m	楕円形	弥生後期	*
21	前立山遺跡	鹿足郡六日町 大字住進川字前立山	25棟	5 m ~ 5.5m 5.4~5.5m 4.1~4.8m 6.9×5.7m 7.1×4.9m	円 形 5棟 楕円形 8棟 方 形 6棟 椭 形 1棟 楕円形 1棟 不 觚 2棟	弥生時代後葉～古墳 時代初期	島根県教育委員会『中国県東白 鳥原遺跡に伴う歴史文化財免 査査査報告書』昭和55年3月
22	美尾原P区法 遺跡	邑智郡昭和町淀 原	2棟	直径 6 m 不 明	円 形 方 形	弥生時代後期	境町教育委員会『淀原町長尾 原P区法遺跡住居跡調査報告書』 昭和55年5月

註

- 註1. 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ』1976～1978年
- 註2. 米子市教育委員会・米子市福市遺跡調査団『福市遺跡』1968年
- 註3. 松江市教育委員会・松江市土地開発公社『堤頭遺跡』昭和61年
- 註4. 松江市教育委員会『蔥沢A遺跡・蔥沢B遺跡、別所遺跡』昭和63年
- 註5. 大栄町教育委員会『上種第5遺跡発掘調査報告』1985年
- 註6. 東森市良「九重式土器について」『考古学雑誌』第57巻第1号 1973年  
前島己基・松本岩雄「結語」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書  
』島根県教育委員会 1977年
- 註7. 出雲考古学研究会『出雲平野の集落遺跡Ⅰ矢野遺跡とその周辺』1986年



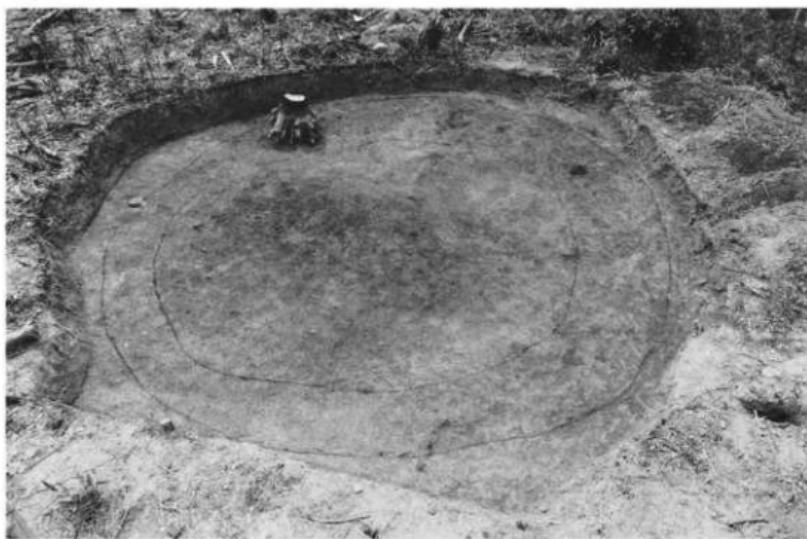
遠 景（西からみる）



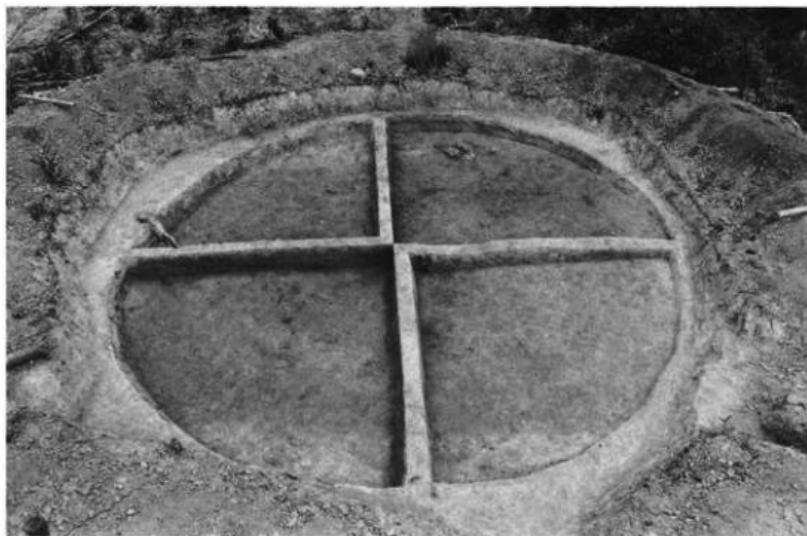
廻田遺跡全景（北からみる）



迴田古墳全景（南からみる）



SI01 平面プラン検出状況（西から）



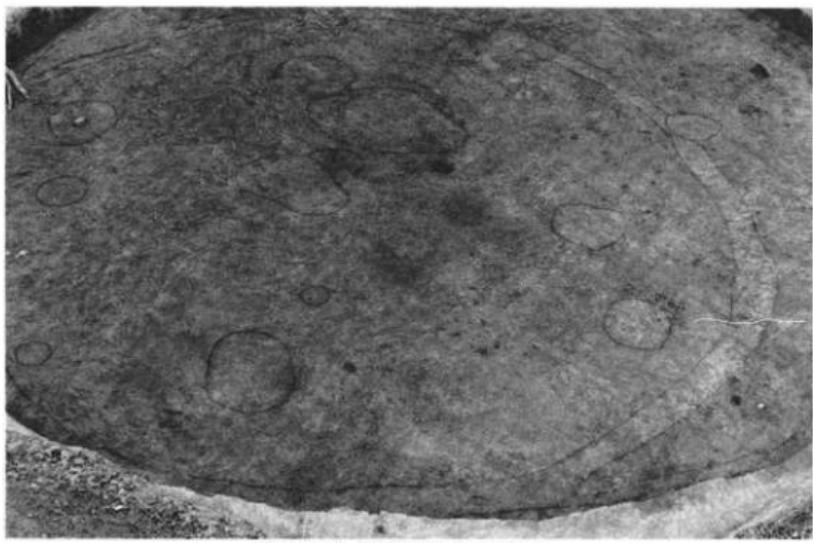
SI01 検出状況（北から）



SI01 検出作業風景（北から）



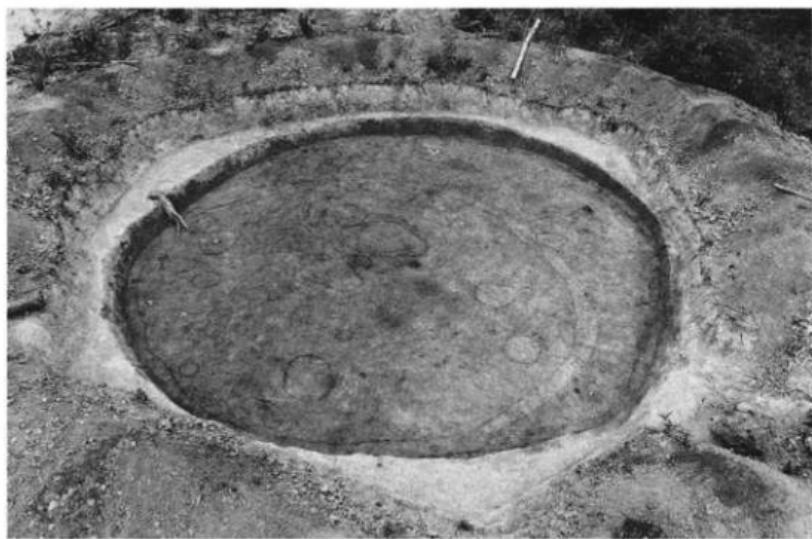
SI01 内土器出土状況



SI01 内ピット等検出状況（北から）



SI01 内土器出土状況



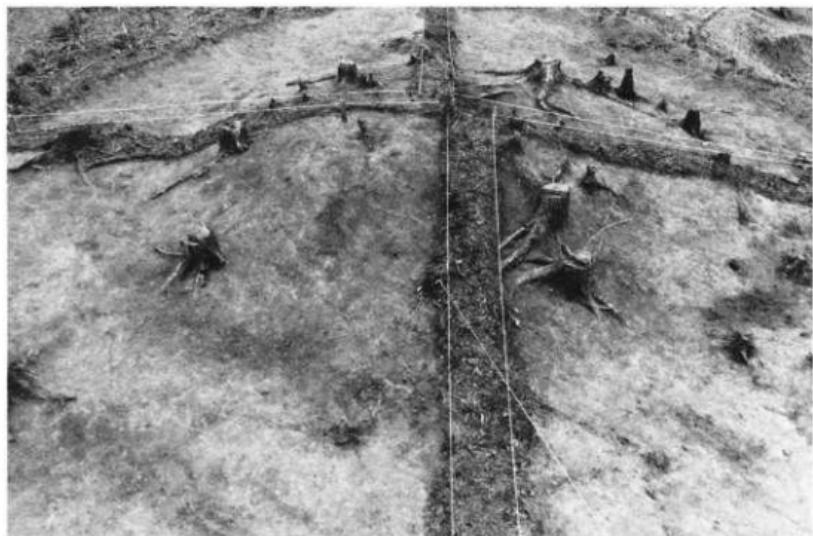
SI01 内ピット等検出状況（北から）



SI01 换出後状況



古墳全景(南から)



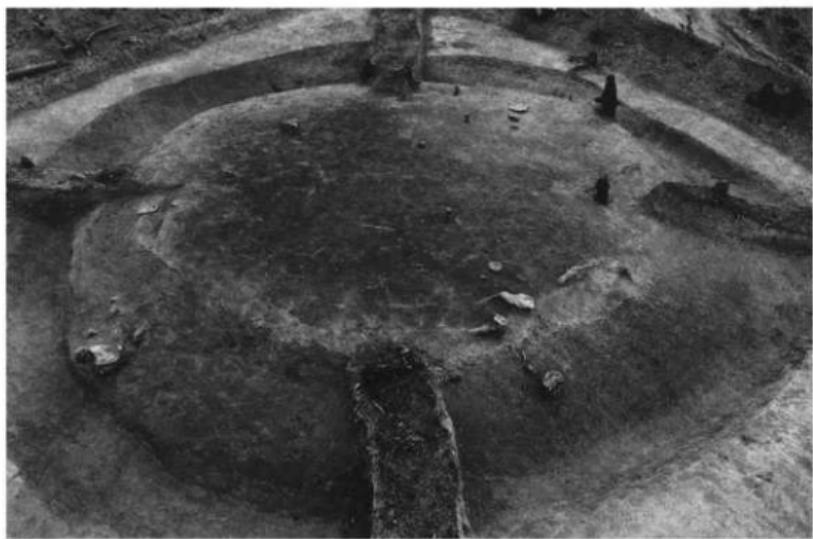
表土はぎ後状況（北から）



盛土除去後状況（北から）



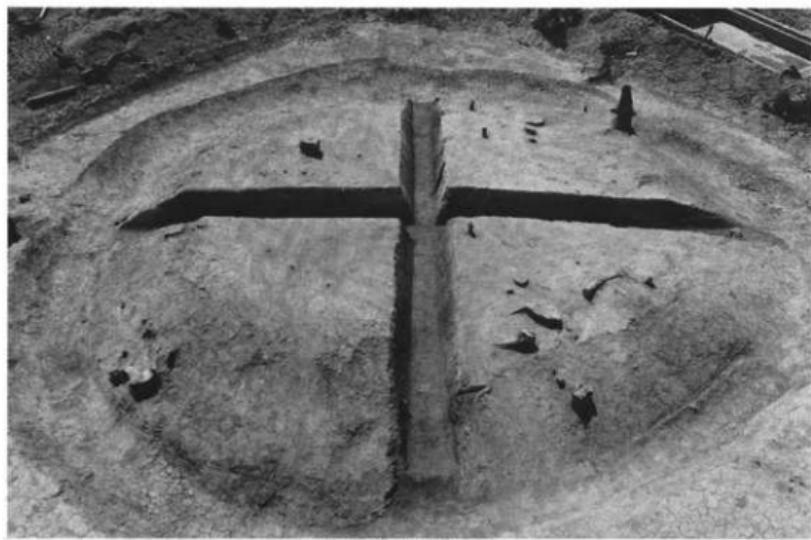
畦除去後状況（北から）



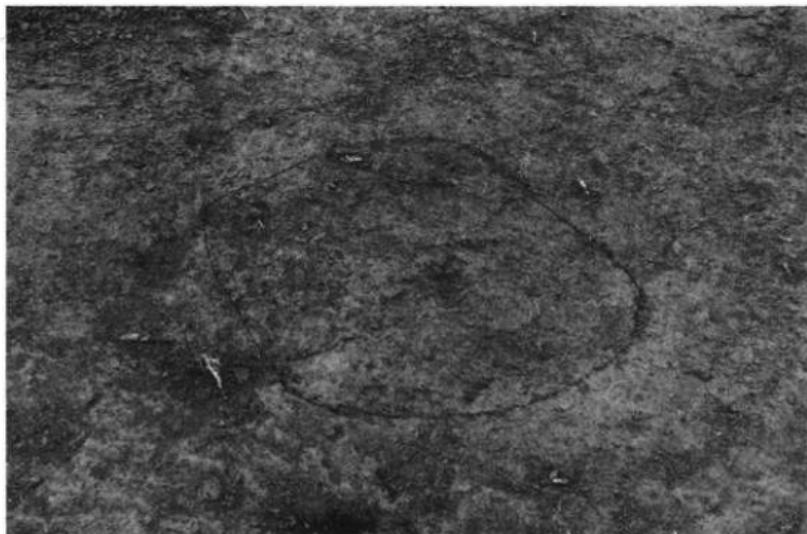
周溝検出状況（北から）



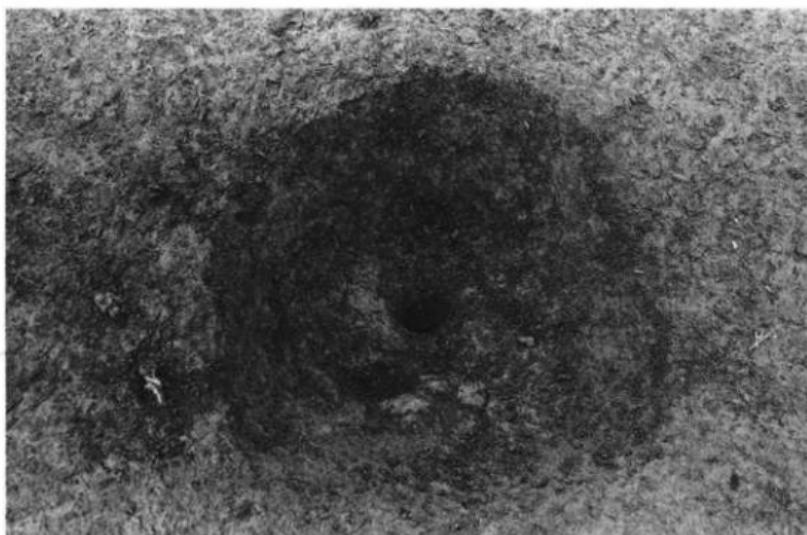
古墳完堀状況



断ち割り後状況（北から）



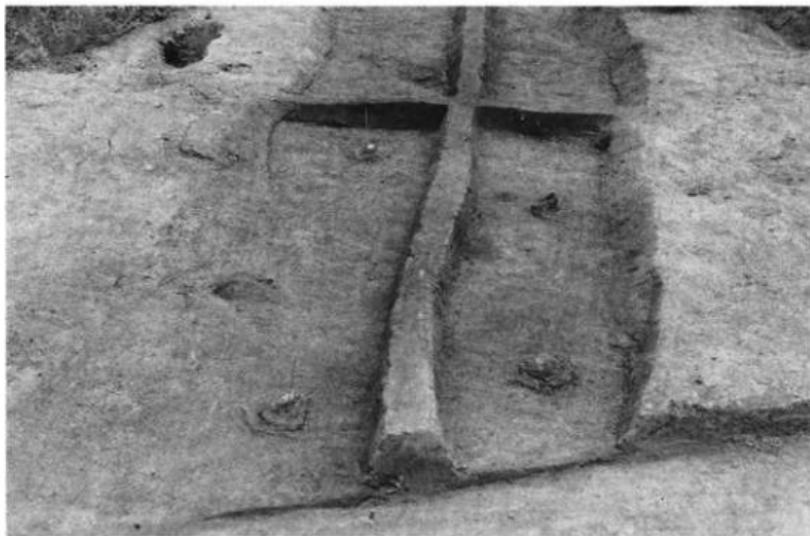
SK01 平面プラン検出状況



SK01 検出状況



SD01 平面プラン検出状況



SD01 検出状況



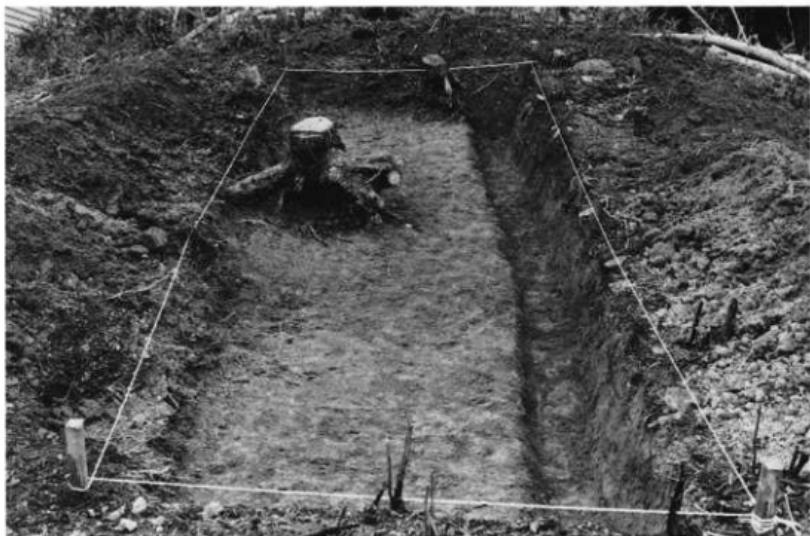
SD01 内土器出土状况



SD01 检出後状况



A トレンチ完堀状況



B トレンチ完堀状況



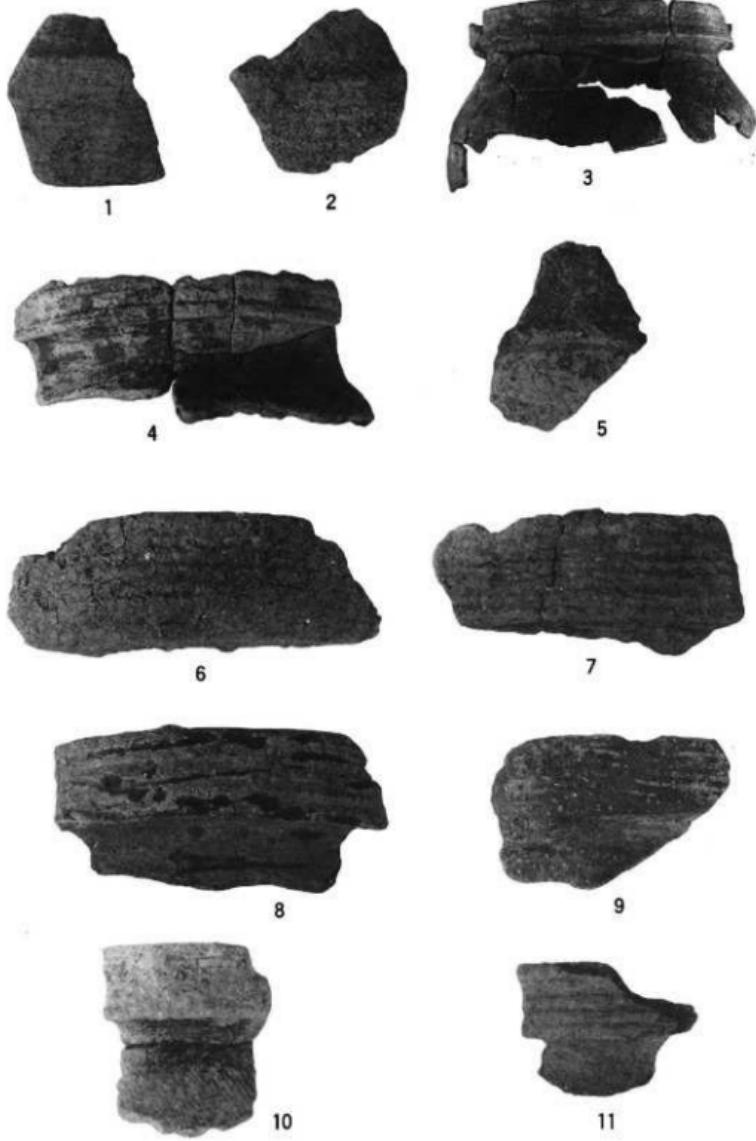
D トレンチ完掘状況



E トレンチ完掘状況



F トレンチ完掘状況





12



13



14



15



16



17



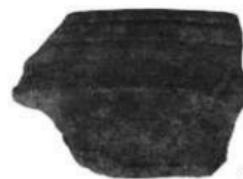
18



20



19



21



22



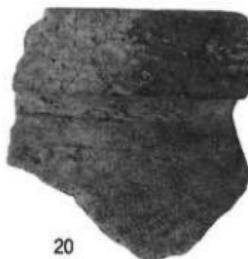
33



24



29



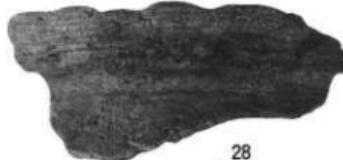
20



27



29



28



31



30



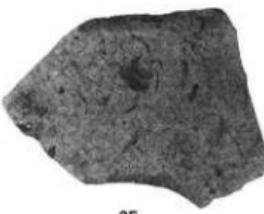
32



33



34



35



36



37



38



39



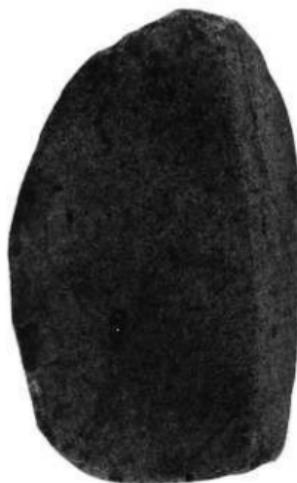
1



2



3



21



22



23



24



石核



1



2



3



4



5

迴田遺跡  
迴田古墳

昭和63年3月発行

発行 松江市教育委員会

印刷 有限会社谷口印刷  
松江市母衣町89

014